古今東西の珠玉のことば 2

古典の智恵 生き方の智恵

谷沢永一 [著]

PHP研究所

特製クロス表紙仕上げ

古今東西の珠玉のことば 2

古典の智恵 生き方の知恵

谷沢永一 著

江苏工业学院图书馆
藏书

PHP研究所

〈著者略歴〉
谷沢永一（たにざわ　えいいち）
関西大学名誉教授。文学博士。昭和4年大阪市生ま
学大学院博士課程修了。関西大学文学部教授を経て、平成3年退職。サントリー学藝賞。大阪市民表彰文化功労。大阪文化賞受賞。専攻は日本近代文学、書誌学。社会評論でも活躍。
著書に『紙つぶて』(文藝春秋)、『百言百話』(中公新書)、『司馬遼太郎の贈りもの』『これだけは聞いてほしい話』(以上、ＰＨＰ研究所)、『悪魔の思想』(クレスト社)、『人間通』(新潮社)、『日本近代文学研叢』全五巻(和泉書院) など多数。

古典の智恵　生き方の智恵
——古今東西の珠玉のことば　2

1998年1月26日　第1版第1刷発行

著　者　谷沢永一
編集協力　PHPエディターズ・グループ
発行者　江口克彦
発行所　ＰＨＰ研究所
東京本部　〒102 千代田区三番町3番地10
第一出版部　☎03-3239-6221
普及一部　☎03-3239-6233
京都本部　〒601 京都市南区西九条北ノ内町11
☎075-681-4431

組　版　株式会社タイプアンドたいぽ
印刷所　凸版印刷株式会社
製本所　株式会社大進堂

©Eiichi Tanizawa 1998　Printed in Japan
落丁・乱丁本は、送料弊所負担にてお取替えいたします。
ISBN4－569－55013－4

まえがき

自分が生きてゆく道筋に、少しでも良い結果をもたらしてくれるような、役に立つ智恵に満ちた名言に接したい。この切実な願いは誰にも共通しているのではあるまいか。

ところが厄介な事情ながら、世の中には閉口するほど書物が多すぎて、そのどれもこれもをあれこれ読みあさるわけにもいかない。

そこで多くの人が参考にできるよう、すぐれた書物のなかから身にしみるような名言を、探しだして採り集めた名言集が、かなり古くから苦心して編まれてきた。

しかしまことに不思議なことなのだが、非常に光り輝き照り映える名言であっても、ただそれだけを引き抜き取りだして示された場合、直ちに心を動かされ思いを深めるという工合にはいかないようなのである。どうやら世に少なしとせぬ名言の真価と精髄を、本当に心の底から理解しようと思えば、その名言が埋められている前後の脈絡を、忠実にたどらなければならぬのかもしれない。

けれどもそれまた余りに多くの労を要する。世界の思想や文藝の傑作を収録した全集の類いを、片っ端から読んでゆくわけにはいかないであろう。やっぱり一般のわれわれとしては、古

典の急所を手っとり早く有効に咀嚼したい。勝手ながら私もまた若いときからそのように願ってきた。いつごろからであったろうか、私は次のような二箇条の特色をそなえた本が、世にあらわれたらよいのになあと夢みるようになった。

その第一としては、もちろん選り抜きの名言集。古今東西、多くの賢者が、人生経験にもとづく思案のすえ、われわれに残してくれた教えである。いや必ずしも堅苦しい訓誡でなくてもかまわない。心に残る言葉であればなんでもよい。その素晴らしい名言ばかりを列挙した書物は、その本を見つけた幸運な読者である私にとって、生涯の伴侶としての価値を持つだろう。散文であれ詩句であれ呟きであれ、圧縮して要約された言語表現は常に貴重である。

ただし、昔から完読の勧めという、お節介な説教の好きな人たちがいて、いったん読みはじめた以上は最後までやめるな、と至っておごそかに権威をふりまわす。私はそういう根拠のない脅しには以前から反対である。いかに著名な古典であっても、一巻のすべてを読み通さねばならぬという理由はない。どの本に対してであっても、我が心琴に触れた部分のみ、自分と御縁があるのだと思う。それゆえ私は性癖からであろうか、あらゆる書物から抜粋された名句集を好む。

その上で私が期待する第二の夢としては、考えあって選ばれたひとつひとつの名句に、なんらかの意味における注釈がついている措置である。事実の問題として既に刊行されている名句

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

集には、それぞれを解釈したり反芻したりするための手掛かりがない。その欠落が私にとっては不満である。それほどむつかしい議論でなくてもよい。ごく気楽な雑談で結構、と気易く私は考える。昭和四年生まれの私は、駄菓子としての飴玉に、おまけの玩具（おもちゃ）がついているのに慣れているので、その期待が癖になり、名言集にもおまけとしての注釈をねだりたくなったのかもしれない。

そこでぼんやり待っているのも藝がないから、自分が選んだ名言集に、自分流の雑談を加える工夫を試みた。かなり苦労してなんとか一冊にまとめたのが『百言百話』（昭和60年2月25日・中公新書）である。暫くして、それを参考にしたＰＨＰエディターズ・グループが、独自の観点から名句を選び、私に注釈のような感想を附加するよう求められた。すなわち『名言の智恵 人生の智恵』（平成6年1月19日・ＰＨＰ研究所）である。幸いにも好評を得たので、ＰＨＰエディターズ・グループは前回と同じく、これまた独自の採択基準を以て第二次名句集を準備された。残念ながら私の病弱ゆえ、解説部分の執筆が遅れたのをお詫びしたい。この本もまた読者に励ましの効果を生むよう切に期待する次第である。

平成九年十月

谷沢永一

◎目次

まえがき

第一章　「智」を蓄える　11

自分自身の悟性を使用する勇気を持て！——カント／『啓蒙とは何か』　12
よろしく歴代の史書を読むべし——佐藤一斎／『言志後録』　14
お気に入りの著者を見つける——アーノルド・ベネット／『自分の時間』　16
書物が真に読者のものとなるためには——ショウペンハウエル／『読書について』　18
知に欠かせぬ態度——佐藤一斎／『言志後録』　20
雄弁とは——パスカル／『パンセ』　22
エスプリよりもユーモアを——河盛好蔵／『人とつき合う法』　24
感覚を研くには——谷崎潤一郎／『文章読本』　26
学問はまず志を立てるのをもって根本とする——貝原益軒／『大和俗訓』　28
知らぬことを知らぬとする——孔子／『論語』　30

「知りません」のいかにやさしいことか——サマセット・モーム／『作家の手帖』 32
人間世界はただ学問のみにあらず——福澤諭吉／『福澤一太郎宛の書翰』 34
天下は大活物——勝海舟／『氷川清話』 36
哲学なき人民は——中江兆民／『一年有半』 38
東洋と西洋との相違——鈴木大拙／『新編 東洋的な見方』 41
真の哲人とは、人類に対して最後の愛を蔵している人——メーテルリンク／『智慧と運命』 43

第二章 「仕事」を窮める 45

自己修養に終着駅はない——サミュエル・スマイルズ／『自助論』 46
真摯に努力すべき目的なきより淋しいものはない——西田幾多郎／『西田外彦宛書簡』 48
気乗りは、仕事をはじめれば——カール・ヒルティ／『幸福論』 51
仕事に没頭するという本当の勤勉——カール・ヒルティ／『幸福論』 53
力が足りないと初めから見切りをつけるな——孔子／『論語』 55
吾が事終わりと思うべからず——九代目市川団十郎／『團洲百話』 57
そもそも、上手にも悪きところあり——世阿弥／『風姿花伝』 59

名刺で仕事をするな——扇谷正造／『諸君！　名刺で仕事をするな』　61
ほんとうにものの味がわかるためには——北大路魯山人／『魯山人味道』　63
勝とうとするのではなく負けないようにせよ——吉田兼好／『徒然草』　65
三つに一つは見切ること——海保青陵／『前識談』　67
平気で人にものをきくから知恵が入ってくる——本田宗一郎／『本田宗一郎一日一話』　69
大勢の人たちと親しくつきあう——山本常朝／『葉隠聞書』　71
人間の値打ちは何によって判断すべきか——ラ・ロシュフコー／『箴言と省察』　73
説き伏せるには大胆な人を、説き勧めるには話のうまい人を——ベーコン／『ベーコン随想集』　75
交渉家の資質と行状について——カリエール／『外交談判法』　77
主君の心が明らかであれば——中江藤樹／『翁問答』　79
私の責任です——松下幸之助／『社員心得帖』　81
命もいらず、名もいらず——西郷隆盛／『西郷南洲遺訓』　84
国民的性格は、たえず涵養さるべきもの——長谷川如是閑／『日本的性格』　86
民は信なければ立たず——孔子／『論語』　88
人生には順調なときも不調のときもある——大山康晴／『勝負のこころ』　90
十年間の辛抱ができる人は——勝海舟／『氷川清話』　92
本当の休息は活動のさなかにある——カール・ヒルティ／『幸福論』　94

ひとりよろこびながら仕事に打ち込む――北大路魯山人／『魯山人味道』 97
職人の心意気――斎藤隆介／『職人衆昔ばなし』 99

第三章 「人情」に熟する 101

最高の教育者とは――マーク・トウェイン／『人間とは何か』 102
名誉を求める心――パスカル／『パンセ』 104
頬をゆるめて人を諭す――佐藤一斎／『言志後録』 106
交際を長続きさせるための工夫を――ラ・ロシュフコー／『箴言と省察』 108
交際相手としての敵の価値――カール・ヒルティ／『幸福論』 110
人間というものは――『大学』 112
恩は忘れず、怨は忘れよ――洪自誠／『菜根譚』 115
みだりにわが上を語るなかれ――森鷗外／『智慧袋』 117
自惚――ラ・ロシュフコー／『箴言と省察』 119
世に応ずる道とは――伊藤仁斎／『童子問』 121
遠慮の二字が肝要――『甲陽軍鑑』 123

自分の住んでいる家ほど良いものはない——横光利一／『着物と心』 125
わが身に立ちかえってみずからに問う——貝原益軒／『大和俗訓』 127
義を見てなさざるは勇なきなり——孔子／『論語』 130
善い後悔、悪い後悔——デカルト／『情念論』 132
憂鬱病の人には——アラン／『幸福論』 134
よろづの事は頼むべからず——吉田兼好／『徒然草』 136
心の器のせまい人、ひろい人——貝原益軒／『大和俗訓』 140
平生はみんな善人なんです——夏目漱石／『こころ』 143
気ばらしなしには、よろこびがない——パスカル／『パンセ』 145
私はいままで、嫌いな人に一人も会ったことがない——淀川長治／『夜中の学校③ 美学入門』 147

第四章 「人生」を耕す 149

人は一つの生命を託されているもの——武者小路実篤／『人生論』 150
信念があれば成功する——松下幸之助／『私の履歴書 経済人1』 152
日ごろの振舞いや言動こそが——山本常朝／『葉隠聞書』 154

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

精神主義には限界がある――清沢洌／『暗黒日記』 156
人生、人生というが……――二葉亭四迷／『私は懐疑派だ』 158
人間には三つの事件しかない――ラ・ブリュイエール／『カラクテール』 160
うずうずする精神、それが人間――スタインベック／『怒りの葡萄』 162
悟りということ――正岡子規／『病牀六尺』 164
哲学するのにふさわしい時期などない――エピクロス／『メノイケウスへの手紙から』 166
人がその自我を捨てさるのは――トルストイ／『人生論』 168
虚飾をぬぎ去って――坂口安吾／『続堕落論』 170
必要なものは、大きな内的な孤独――リルケ／『若き詩人への手紙』 172
人間が自分自身について無知であるというのは――アレキシス・カレル／『人間この未知なるもの』 174
われはわれが最も親しき友なり――森鷗外／『智慧袋』 176
自分を熱愛し、自分を大切にせよ――志賀直哉／『青臭帖』 178
もし万が一にも道徳論を書かねばならないならば――アラン／『幸福論』 180
おのれの身の行い立たずして――九代目市川団十郎／『團洲百話』 182
その時分、時分にならなければ――田山花袋／『泉』 184
分相応の楽しみ――恩田木工／『日暮硯』 186
生活を楽しむ者は――三木清／『人生論ノート』 188

私は独りして飲むことを愛する――若山牧水／『酒の讃と苦笑』 190
幸運も常に勤勉な人間の肩を持つ――サミュエル・スマイルズ／『自助論』 192
運命とのつきあい方――ラ・ロシュフコー／『箴言と省察』 194
時を待つ心――松下幸之助／『道をひらく』 196
邂逅の歓喜あるところに人生の幸福がある――亀井勝一郎／『絶望からの出発』 198
不幸の責任のありか――モンテーニュ／『エセー』 200
運命を愛せよ――和辻哲郎／『偶像再興』 202
【原典・人名索引】 204

本文イラスト　谷井建三

【凡例】

①原典は、読みやすさを考え、新字表記を原則とした。ただし、仮名遣いは、所収に従うことを原則とした。

②漢文の原典に関しては、白文は割愛し、読み下し文を掲げた。

第一章　「智」を蓄える

自分自身の悟性を使用する勇気を持て！——カント

●18世紀のドイツの哲学者

『啓蒙とは何か』（篠田英雄訳）

啓蒙とは、人間が自分の未成年状態から抜けでることである、ところでこの状態は、人間がみずから招いたものであるから、彼自身にその責めがある。未成年とは、他人の指導がなければ、自分自身の悟性を使用し得ない状態である。ところでかかる未成年状態にとどまっているのは彼自身に責めがある、というのは、この状態にある原因は、悟性が欠けているためではなくて、むしろ他人の指導がなくても自分自身の悟性を敢えて使用しようとする決意と勇気とを欠くところにあるからである。それだから「敢えて賢こかれ！（Sapere aude）」、「自分自身の悟性を使用する勇気をもて！」——これがすなわち啓蒙の標語である。

（岩波文庫7頁）

啓蒙という言葉は、蒙、すなわち暗い状態を打開して、世の物事がよく解る見通しのよい境遇へ進み出る精神活動のことである。誰がそれをするのか。自分が、自分の力によって、である。啓蒙とはすなわち自己啓発である。この間の真当（まっとう）な事情が、ともすれば忘れられがちなの

は宜しくない。

一般に、啓蒙書、などと呼ばれている本がある。誰か賢い人が、或いは専門の道に通じた者が、何も知らない読者に対して、やさしく教える書物、というような意味に受けとられている。もっと平たく言えば、かなり調子を下ろして噛み砕くように書いた本、という風に蔑まれている。この場合は、誰か他人によって蒙を啓いて貰いたいという虫のいい願望に応えて、そういうお節介な著作が現われるのである。いわゆる啓蒙書、入門書、案内書、概説概論、それらを読むのは、ほとんどの場合、時間の無駄である。むつかしくても原典と格闘する心意気が肝心である。

よろしく歴代の史書を読むべし——佐藤一斎

●江戸後期の儒学者

『言志後録』（川上正光訳）

人の一生の履歴は、幼児と老後とを除けば、率ね四五十年間に過ぎず。其の聞見する所は、殆ど一史だにも足らず。故に宜しく歴代の史書を読むべし。上下数千年の事迹、羅ねて胸臆に在らば、亦快たらざらんや。眼を著くる処は、最も人情事変の上に在れ。

［訳文］人の一生の履歴は幼年時代と老後とをのぞけば、おおよそ四、五十年間に過ぎない。従ってその見聞する所はほとんど歴史の一部にも及ばない。だから、歴代の史書を読むがよい。それによって、古より今に至る上下数千年の事跡が自分の胸中に羅列されるならばこれまた痛快なことではないか。史書を読むに当っては、最も人心の動きと事件の変化具合の上に眼をつけるがよい。

（『言志四録（二）』講談社学術文庫67、68頁）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton